

私たちが紡ぐ平和への意志

中沢中学校3年 松本 海斗

毎朝、何気なくつけているテレビから流れるニュースが、私の心を大きく揺さぶった。画面に映し出されていたのは、遠い異国の地で続く武力衝突の映像だった。破壊された街並みや、住み慣れた家を追われて涙を流す人々の姿、あるいは私と同世代の子どもたちが怯えた表情で避難所に身を寄せている様子に、言葉を失った。それと同時に、自分が今、温かい部屋で朝食を食べ、当たり前のように学校へ行く準備をしている日常とのあまりの違いに、強い違和感を覚えた。なぜ世界には未だに争いが絶えないのか。私たちは同じ人間であるはずなのに、どうして傷つけ合わなければならないのか。テレビの画面を眺めているだけでは、この疑問の答えは見つからない。そう感じた私は、世界で起きている紛争の現状と、日本が歩んできた歴史について、自ら詳しく調べてみることにした。

私はまず、図書館へ行き、戦争に関する資料や過去の新聞記事、そして当時の様子を伝える写真集をいくつか手に取ってみた。調べていくうちに、世界中で今なお数多くの地域が紛争状態にあり、多くの一般市民が犠牲になっているという厳しい現実をデータとして突きつけられた。さらに歴史を遡ると、私たちの国である日本もかつては大きな戦争を引き起こし、多くの尊い命を失った過去がある。特に原爆が投下された広島や長崎の悲劇、そして多くの市民が巻き込まれた地上戦が行われた沖縄の歴史は、教科書の文字を読むだけでも胸が締め付けられるものだった。

しかし、現代の日本を生きる私にとって、これらはどこか「遠い過去の出来事」のように感じられていたことも事実である。そこで私は、写真集や記録映像をより深く見つめ直すことにした。そこに残されていたのは、言葉を失うほど凄惨な光景だった。空襲によって一面が焼け野原になった都市、崩れた家々の前で立ち尽くす人々、そして何より、今の私よりも小さな子どもたちが、ぼろぼろの服を着て飢えに苦しんでいる写真が強く印象に残った。

それらの資料を読み進める中で、私はある重要な事実気がついた。戦争というものは、単に国と国が兵器を使って戦う政治的な出来事ではない。普通に暮らしていた人々の当たり前の生活や、大切な家族とのささやかな幸せ、そして未来への希望を、一瞬にして根こそぎ奪い去ってしまう容赦のない暴力なのだ。

ニュースで見た異国の子どもたちの怯えた表情と、数十年前の日本の写真に写る子どもたちの姿が、私の頭の中で一つに重なった。形や時代、国籍は違っても、戦争がもたらす悲劇の本質は全く同じであり、それは決して他人事ではないのだと強く実感した。人間が人間らしく生きる権利をすべて奪うもの、それが戦争の真の恐ろしさなのだと、資料の山を前にして深く理解した。

これらの学びを通じて、私は平和に対する自分の考えを明確に持つようになった。平和とは単に「武器を使った戦争が起きていない状態」を指すのではない。誰もが恐怖に怯えることなく、大切な人と共に安心して暮らし、自分の未来に向かって自由に夢を描くことができる状態こそが、本当の平和なのだと確信している。

だからこそ、私たちはこの悲惨な歴史を未来へ繰り返してはならない。武力による抑止や解決は、さらなる憎しみの連鎖を生むだけであり、いかなる大義名分があろうとも、人の命を奪う行為は絶対に正当化されない。国籍や文化が違えど、命の尊厳に優劣など存在しないのだ。

私たち一人ひとりにできる草の根の活動は小さく見えるかもしれない。しかし、身近な他者を尊重し、異なる価値観を排除せずに受け入れる寛容さを持つことは確かな平和への第一歩となる。世界の対立に無関心にならない強い意志を持ち、誰もが未来を信じられる世界の実現へ向けて、私は行動し続けたい。